

以上を要するに教授においては、「經營」は或は獨立經濟單位として、また或は技術單位として、また或は生産過程そのもの、價值過程單位として、種々様々に變幻してゐることをわれは知り得た。經營とは教授において實は掴みどころの無いものとなつてゐるのである。

教授において如何に概念が曖昧であるかは、斯學の研究對象を論じ、それが統一體なることを力説せられ、かゝる統一體は「これは經營、企業又は個別經濟」とせられ、結局吾人の研究は經營又は企業である」とせられてゐる。<sup>25)</sup> 企業と個別經濟とが換置せられるのをみてもこのことが判る筈である。かくてわれは教授が經營を經營共同體 Betriebsgemeinschaft として規定されたことはかゝる共同體そのものに特殊の意義 Bedeutung の何ものをも含有してゐないことが判明し、ニックリツシユのそれとは比較せらるべくもないことが理解せられて宜い譯である。宜なる哉、教授においてはひとしく市場も家族もともに共同體であつたことから何ら經營特有の意味をもたず、共同體すなはちゲマインシャフトの本質の片鱗すら特殊のものをもつてゐないことが判明した。

## 六 經營＝強固經濟的構成體説の紹介と批評

シエンブルークはその最近の著作<sup>1)</sup>において經濟の經營を指定する前に、先づ一般的に「經營」Betrieb を社會的構成體 soziale Gebilde の一種として把握する。

25) 向井教授 前掲書 一〇、一一頁。

1) F. Schönplflug, Der Erkenntnisgegenstand der Betriebswirtschaftslehre, 1936.

この書については經濟學論集 第六卷 第十號における高宮晋氏の論文をも参照。

氏の着想は經營をもつて内容的にこれを限定する前に先づもつてこれを社會學的形式的問題 soziologisches Problem der Form として把握せむとする。こゝではたゞ經營が一定制限のもとの一の社會的構成體なるの故に、「先づ以て「社會的構成體」一般 soziale Gebilde überhaupt の本質が問題となる。<sup>2)</sup> (その限り、經營は組織的單位として社會的生活の到るところに存在し、經濟的經營、學術經營、教育經營、宗教經營等々みな經營である。經營はこの意義においては社會的現象であり、社會が人間の諸關係の秩序のために必要とする一つの基礎要素である。<sup>3)</sup>」

さて氏によれば、一般的に社會的構成體は人間の行爲結合體 Zusammengesetzte Handlungen; Handlungsgesamt; Handlungsgagregat であるが、このものはそれへの結合における意志形成の仕方に應じて、「締りゆるき構成體 offene Gebilde」と「締り固き構成體 geschlossene Gebilde」とに分れる。前者は、多數の個別意志が相互に獨立しつゝ同一方向に向つてゐる場合のそれで、個々の行爲の同點輻合の上に立つ。後者は、これに反して、諸々の行爲を一つの行爲統合へ結合することが、一箇の統一的意志の活動によつて、すなはち一定の主體によつて意識的に意欲せられ、そのあらゆる部分において、それが合計畫的に構成せられる場合のそれである。<sup>4)</sup> 氏はかくの如くしてなほ社會的構成體についてその種々なる諸區別を立てるのであるが、<sup>5)</sup> 要するにかくて氏が社會的構成體一般から區別して、經營なる社會的構成體について定義するところによれば、「經營とは締り固き社

2) Schönplflug, Ibid. S. 87.

3) Schönplflug, Ibid. S. 87 ff.

4) Schönplflug, Ibid. S. 101, 102.

5) Schönplflug, Ibid. S. 102 ff.

會的構成體として、反復的目的を同一方法で時間無制限的に繰返し行はむがための、統一的組織計畫に従つて行はれる、強固な豫前的な物的準備の基礎に立つところの「継続的組織 Daueranstaltung」である<sup>6)</sup>。

すなはち、この「經營」なる社會的構成體の組織屬性は、一、「締りの強固性」Geschlossenheitであり、「締りゆるぎ構成體」は經營ではない。この必要な性質は、意志の單一性によつて基礎づけられそのもとに行爲總體が部分化しつゝしかも内面的關聯に立つ一つの全體に形成せられるといふことであり、二、「継続性」Dauerをもち、經營はその理念に従つて時間無制限性のものであり、そのために強固な設備の存することが經營における諸行爲が同一方法で反復され、遂行労働が順序と連絡をもつために必要であり、三、「強制性」Zwangsläufigkeitありて、かゝる継続的遂行が原則に従つて強制的に保證されてゐることにある<sup>7)</sup>。

以上の性質が氏による社會的構成體の一種としての「經營構成體」一般の具備する諸條件であるが、要するにそれらはこのものゝ形式性にすぎないから、かゝるものとしては「經營構成體」はそれ自體何ら技術的、經濟的、政治的その他の特殊内容的なものでないが、しかも事情の如何によりては、一定の經營形態は實に技術的、經濟的その他の組織的單位體たり得るのである<sup>8)</sup>。

さて、以上の如き「經營構成體」の形式的規定の後に、氏は次にその「内容」Inhaltを問題とす

6) Schönplflug, Ibid. S. 104.  
7) Schönplflug, Ibid. S. 104, 105.  
8) Schönplflug, Ibid. S. 106.

る。而して一定の經營構成體が經濟的内容をもつておほはれたるときそれは氏において始めて經濟經營構成體となり、經營經濟學の認識對象は經營的に組織された經濟構成體 betrieblich organisierte Wirtschaftsgebilde である。それ故に經濟構成體はつねに經營的なる經濟構成體ではない。そのうちの「經營形式」において組織された諸經濟單位 die in Betriebsform organisierten Wirtschaftseinheiten」のみが經營的なる經濟構成體であり得る<sup>9)</sup>。

氏はかくて經營の經濟的性質を規定するためにシュパンやゴツトルの經濟本質觀を批評し、欲望充足のための手段調達をもつて經濟の概念とすること説を一面的なりとし、經濟とは「一つの主體が經濟的見地のもとに規制するところの、社會のうちで遂げられる行爲の總體である」とし、「行爲が經濟的として認められるのは、それが一つの主體の諸行爲をその主觀的效用、すなはち、費用と成果との可及的最大限度差額 Wertspanne zwischen Aufwand und Ertrag の見地から判斷するからである<sup>10)</sup>」と。すなはち、氏は經濟行爲の本質を主觀的經濟性に求める。

かゝる經濟概念の當否はこゝには別として、かくて、氏の「經濟的經營構成體」とは然らば如何なるものであるか。すなはち、前述の形式が經濟的内容をもちて現はれることは勿論である。定義して曰く、「經營經濟（經濟的經營構成體）」とは、個別的または全體的性質の、締りの強固な社會的構成體であり、それは經濟的見地のもとに統一的に行はれる行爲を、強固な豫前的な物的準備の基礎

9) Schönplflug, Ibid. S. 165.  
10) Schönplflug, Ibid. S. 130.

の上で、それ自體時間無制限的な繼續性と、強制的保證のある行爲過程とにおいて、一つの組織にまで統一するものである<sup>11)</sup>と。

だから氏によれば、社會一般、經濟一般、經營一般に對して、經營經濟を制限する特質としては、一、「社會的構成體」であり、二、「縮り固き構成體 ein geschlossene Gebilde」であり、三、個別的もしくは全體的構成體であり、四、經濟的内容をもつてみたされた構成體であり、五、そのみに認められ他の如何なる經濟構成體にも存しない特質として縮りの強固性、繼續性、強制的性等の經營の要件を具備するとともに、六、組織的單位體なること、等が擧げられてゐる<sup>12)</sup>。

これらのうち、第二の特質に従つて、低度の「縮り固き構成體」ならびに「縮りゆるき構成體」は經營經濟にあらず、今日われわれの國民經濟は經營的に組織された形式の一つの全體的構成體でないから、すなはち「縮りゆるき構成體」の故に經營經濟ではない<sup>13)</sup>。そこではたゞ縮り固き形態の個別經濟として生産經濟の領域のそれがある。が、これに反して消費經濟は通常これと異り輕き組織形態をとる。その故に現在の經濟に關する限り生産經濟的領域のものが經營經濟となるであらうと<sup>14)</sup>。然るに、國民經濟が「縮り固き構成體」すなはち計畫經濟である場合、それはその完全な強固性と組織性の故に經營經濟となる。この際、國民經濟なる概念は個別經濟のそれと同一概念となり、國民經濟は唯一の大なる個別經濟であるともにかゝる個別經濟はまた國民經濟であるといふこととなる。

従つてこれを對象とする經濟學は「國民的經營經濟學 die nationale Betriebswirtschaftslehre」である<sup>15)</sup>。

以上を要するに、「經營」は元來形式であるから必しも經濟的なものではない。「經濟」は内容としてまたそれは必しも經營の形式をとる構成體でもないからつねに經營的なものでもない。二つのものは對立的である。たゞ、經營は經濟のとり一種の組織形態として現はれるとき、それが經濟的經營といふ社會的構成體となる。しかも、如何なる經濟構成體も經營の形式的要件を具備する限り、それは經濟の經營すなはち經營經濟と見らるべきであるといふのが氏の主張である。

さて、以上シエンブルークの經營經濟構成體説をその必要な限りで紹介したが、氏の經濟的經營の規定の中心が、疑もなく、經營一般の形式性におかれ、この形式規定に資格を獲たる經濟のみが經濟的意義における經營とされてゐるのであつた。然るにこの經營一般の形式的諸要件なるものが如何に嚴密なものであるかは一驚に値する外なく、全く氏の頭腦の如何に技巧的、想象的なるかを示すものである。氏はその天才的技巧頭腦の及ぶかぎりをつくして精緻嚴密なるボーレを經營形式のために粘り上げたのではないか。

おもふに、經營の目的なるものもしくは固定的不是な、況してその方法もまた同様に不可變性のものであり得ない。氏は強固な物的準備を強調するもこれも相對的なものではないかとおもふ。

15) Schönplflug, Ibid. S. 133, 153, 154, 165, 177.

11) Schönplflug, Ibid. S. 153.

12) Schönplflug, Ibid. S. 153 ff.

13) Schönplflug, Ibid. S. 132, 133, 179.

14) Schönplflug, Ibid. S. 139.

「縮りの強固性」といつても程度の問題であり、資本主義的組織的企業と、家庭經濟、國民經濟の三者はひとしく經濟であり乍らその「縮りの性質」にはそれぞれ各々の本質に應じた「縮り方」といふものが存する筈である。家庭經濟のごときものでさえ外部者の意志介入の認められない限り主體的に統一せられてゐる筈であり、國民經濟の統制といつても全個別經濟の行爲の各般を規定するやうなものではない。國民經濟の縮り方の強固性が、資本主義的組織的企業の典型的なものと同一でなければならぬならば、事實としての計畫經濟にもかゝるものが存し得るかどうかといふことさえ問題となるであらう。

氏は企業においてさえ、それが彼のごとき条件を具へざるときこれを經營と認めないごとくであるが、<sup>16)</sup> かくの如くは事實上の認定が研究に先立つて先づ必要となり、對象は惜しみもなく氏の網目から脱逸してゆくであらう。「縮りの固さ」についても氏は種々の程度を想定上擧げ、「縮りゆるきものにも ein offenes Gebilde höchster Grades があり、「縮り強固なもの」geschlossenes Gebilde にも niedere Ordnung; höhere Ordnung; höchster Ordnung を區別するが、全く相對的なものでしかない。「より強固なもの」もその下層からみれば「強固なもの」であり、計畫經濟を「強固なもの」最高のものですることに誤りなくとも、われ／＼の國民經濟を「ゆるきもの」最高のものでみるといふのも相對的な決定でしかあり得ないであらう。氏は、ニツクリツシュが經營の形式とし

16) Schönplflug, Ibid. 157.

ての廣さを飛び超えて直にこれを經濟的なものと規定せむとし、或は價值を直ちに經濟的價值として把握しやうとしたことを非難するが、<sup>17)</sup> かく非難する氏はまた經營を不當に嚴格づけこれを固定化したのではあるまいか。

併し乍ら、氏において見逃してはならぬ長所は、一種の理想的方法(あまりにも複雑ではあるが)によつて、經營を社會經濟に對して極力分明ならしめやうと努力せし點において、經營の意志統一性の強調(たとへ過度の強調ではあるが)であり、また、その經濟一般の規定は兎も角、經營經濟の追求する價值、從つてその目標が、主體の主觀的經濟性なりとして、<sup>18)</sup> これを經濟的經營の意欲對象として把握しやうとした點にある。但し、その内容が氏の説くごときものであり<sup>19)</sup> それに限るかといふ點は私見の疑問視するところであるが、<sup>20)</sup> その想着には採るべきところがあるとおもふ。

### 七 經營||意志經濟說の紹介と批評

以上の數項において經營そのものゝ概念に關する諸說の紹介と批評をなしたのであるが、最後に本項では、經營を最も妥當に解したるものとして經營||意志經濟說とでも名づくべき考につき叙述しやうとおもふ。

元來、經營學者のうちには「經營」を、最初から、何らかの經濟もしくは經濟の技術的生產單位

17) Schönplflug, Ibid. S. 86.

18) Schönplflug, Ibid. S. 130.

19) Schönplflug, Ibid. S. 115 ff.

20) この點に就ては「經營學的價值」に關する章を参照。

として措定せず、むしろこれを素朴的ではあるが、却つてそのために固着的にはなく、無理なくして経済的概念としても妥當な解釋をもつに至つてゐる若干の人々がある。例へば、

プリオンは、「吾々の叙述の對象は『經濟經營』 Wirtschaftsbetrieb である、それ故に「經濟の經營」 Betrieb der Wirtschaft とは何を意味するかを明にせなければならぬ」と云ふ。然るに元來『經營』なる言葉はつねに種々の意味に使用されてゐるから先づこの言葉の意義を明にする必要ありとし、この言葉自體について「經營 Betrieb は『經營する』 betreiben といふことから轉導されたことは、宛も經濟が『經濟する』 wirtschaften ことから導來されたのと同様である」と云ふ。かくて氏は「何ごとかを企劃し、遂行し、成就し、企圖したる目的を實現する」限りこれすべて『經營する』ことであると云ふ。従つてひとは競技、社交、遊戲、經濟、藝術、教育、司法、祭祀等あらゆる可能な事柄を經營し得、それ故に人間の活動の全範圍において經營活動が、従つて『經營』が存する」といふ。遊戲經營、競技經營、社交經營、および、經濟經營すなはちそれであると。<sup>1)</sup>

それ故に氏はこの出發點を重要だといふ、蓋し、經營なる言葉は何らかの活動に對ふものではあるが、如何なる企圖に向ふかは言葉それ自體としては未定であるとして、それ故にこの言葉を一定の企圖のものとしてすなはち工場 Werkstatt を經營として規定する如きは不可なりと云つてゐる。<sup>2)</sup> かやうにして氏によれば、「經營とは、一定の活動の秩序的、目的意識的、合計畫的遂行である」。

1) W. Prion, Die Lehre vom Wirtschaftsbetrieb, I. Buch, 1935, S. 22, 23.  
 なほこの限りそれは Schönflug に似てゐる。 Schönflug, Ibid. S. 87 ff., 106.  
 2) Prion, Ibid. S. 23.

そして、經濟に關する經營の限りそれは經濟經營 Wirtschaftsbetrieb であり、「經濟行爲、換言して、經濟は、それが遂行されねばならぬ限り、秩序的、合計畫的活動すなはち經營活動を伴ふ」と。<sup>3)</sup> わが國にもまたこのやうな見解が存してゐる。<sup>4)</sup> ライトナー教授も、「經營」の多義的言葉 vieldeutiges Wort なることを暗示し氏の「企業經濟學」の目的のために概念規定の必要を述べて、經營なる言葉を經濟の經營に限定しつゝも、そのうちで極めて廣くこれを解し、△經營とは、繼續的經濟活動の總體 Inbegriff fortdauernder wirtschaftlicher Tätigkeit とし、かゝる活動が營利目的であるとも然らうでなくともどちらでも宜し」と一應云ふ。<sup>5)</sup>

おもふに、元來、經營なる語は第一章の最初に記したごとく、日常的常識語としてはプリオン教授の如く意識的計畫活動一般に妥當するものであらうから、この素朴的ながらこの言葉のもつ日常性を無視することは却つて難點に立つのではあるまいか。元より、生産單位説にあつてもまた生産經濟説においても、經營の意識的合目的活動なることを否定するのではないが、問題はこれをたゞ技術的生産活動に限りもしくは生産經濟的活動に限定した點に存するであらう。その結果、經營の經濟、Wirtschaft des Betriebes といふことき曖昧なる表現を生み、これを技術的生産單位の活動に關する限りの經濟といふ意に解する人の出てくる結果、それは單に企業の一部なりとすることとき不當ではあるが實に止むを得ざる解釋さえ生ずるに至るのである。<sup>6)</sup>

3) Prion, Ibid. S. 23.  
 4) 福田敬太郎教授 商および商業 國民經濟雜誌 第四十八卷第一號。  
 拙稿 經營の支配體を論ず 商業及經濟研究 第五十七冊。  
 5) F. Leitner, Wirtschaftslehre der Unternehmung, S. 23.  
 6) Sölheim, Ibid. S. 61.

されば吾々は上述のごときプリオンのもしくはライトナー的解釋を取りつゝ、しかもこれを經濟學的に嚴密化したるものとして如何なる考が存するであらうかを問ふことが適切とならう。私はそれらの考を一括して經營Ⅱ意志經濟說として以下それを紹介しやうとおもふ。

二

經營Ⅱ意志經濟說に屬せしめむべき考のうち、作田博士のそれは、比較的早き時代においても今日においても最も優れたる見解である。博士は經營概念を一般的に指定され乍らもよくこれを歴史的にも把握せられてゐるとおもふ。

《作田博士によれば、「經營學と經濟學とを區別する標徴は研究の立場の相違にある」のである。たとへその對象が家計であれ、財政であれ、私企業であれ、公企業であれ、「是等の諸活動」は「これを一の特徴に約するならば、要するに各箇經濟の活動であり」、「この各箇經濟に對立するものは公私多數の各箇經濟が結合され居る所の綜合經濟」である。「かくて包括的に言へば、我等が研究對象の相違によつて區別するならば先づ各箇經濟を對象とする各箇經濟學と綜合經濟を對象とする綜合經濟學」とが對照される。」「經營學と經濟學との對照はかゝる意味に解しなければならぬ」と

尤も博士は公私企業についてはこれを企業經營と云はれ、家計、財政については一括してこれを財務經理とし一應經營と經理との別な名辭を使用されるも、これを「包括的に言へば」それらはすべて各箇經濟の活動である

の故に各箇經濟學となり、經濟學と對照せられる經營學はかゝる意味に解されてゐるから、この包括的立場においては經營と經理との區別は、もはや各箇經濟の理由で經營學の對象たる經營と認められるであらう。<sup>3)</sup>

かやうにして博士は、先づ、經營を各箇經濟の活動である點に求められてゐる。然るにこの經營の可能根據たる各箇經濟の立場とは何か、即ち、經營の經營たる本質は博士によつて如何に説かれてゐるか。△然るに各箇經濟には常に意志があり、一の生活主體の經濟活動がこれによつて總束されると見られてゐる。私人でも國家でも各箇經濟は常に意志活動を内容とする意志經濟であつて自然運動の内容とする自然經濟ではないとし、進むで積極的に經營概念を指定せられる。

博士は云はれる、「蓋し經營とは意志がその一定の目的を實現するに當りて、包括的に繼續的に、系統的に秩序的に、計畫を立て、實踐し行く過程を指すのである」と。であるから、經濟學より獨立する經營學を認むるとすれば、「その根據はこれを經營をなす各箇經濟の意志に求めなければならぬ」こととなり、すなはち、各箇經濟は意志經濟なるの故にこそ「經營」となるのである。▽

さて、以上は意志經濟が經營たることを言つたものであるが、この場合かゝる意志經濟なるものは各箇經濟すなはち謂ゆる單獨經濟乃至個別經濟の範圍に限られてゐる。然るに國民經濟は意志經濟すなはち經營として成立し得ざるものであるかどうか、この點を明にすることによつて博士の經營Ⅱ意志經濟說は愈々明確にされるであらう。

3) 同上 同頁。  
4) 作田博士 前掲論文 九頁。  
5) 同上 同頁。

1) 作田莊一博士 經營學と經濟學との對照 山口商學雜誌 第一號 昭和二年。同博士 自然經濟と意思經濟(初版)昭和四年。  
2) 前掲山口商學雜誌。二、三、四頁。

博士に従へば、「綜合經濟たる國民經濟が自然經濟に止まる間は、意志經濟としては唯だ各箇經濟が其々自己の生活目的を實現するに止まる」。然るに、「綜合經濟たる國民經濟は自然經濟より意志經濟に進化する。國家意志が公經濟の意志より超へて國民經濟を統制する意志たるに至れば、それまで各箇經濟を支配したる社會自然力は國家意志力と交替する。多數の小なる意志の上には唯一の大なる意志が出現し、國民經濟も亦意志に依る經濟となる」。「是までの經濟學が國民經濟に統一意志なしと見ながら而かも國民の立場から見たる政策論を云々するは全く背理である」と<sup>6)</sup>。

然らば博士によればすでに意志經濟に進化せる國民經濟は明かに經營と規定されてゐるか、この點を吟味する必要に迫られる譯である。

元々、博士が「經營學と經濟學との對照」なる一文を草せられたのは、宛も當時勃興せむとしつゝあつたわが國における企業經營學への研究熱が漸く旺盛となり、この企業經營學がつねに經濟學との對照においてその特質を明にせられやうとしてゐた時代であつた。だから博士の要求は一般に經營學と經濟學との本質的特質を明にすることゝともに、かゝる企業經營學の規定をその直接の目的とせられたからこれを「企業經營者の立場より企業經營の現象的存在を認定し——すなはち、理論的企業經營學——且つ實踐的適合を制定する——すなはち、企業經營政策學——所の一科學である」と述べてゐられる「線内筆者」と同時に、そもく「經營學は意志經濟たる各箇經濟の研究として財務經理論と

6) 同上 一〇—一三頁。  
作田博士 自然經濟と意思經濟 參照。  
7) 前掲論文 二頁。

共にその獨立を主張し得る」として各箇經濟一般を對象とする經營學一般の獨立の成立性を認められてゐる。

だが、國民經濟が進化して意志經濟となるに至れば、かゝる意志經濟たる國民經濟はシェーンブルクと等しく、一つの新しき大なる各箇經濟と考へられて宜いか、従つてそれを對象とする學は經營學と考へられて宜いか、はたまた、それは經營學ではなくして意志經濟を對象とする經濟學であるか、この點を明にしなければならぬ。而して私はこの點を明かにするためには、博士が經營學と經濟學とを區別せられる根源的なものは博士において「方法」であるか「對象」であるかを見究めれば宜いとおもふ。然るにこの點については博士は根源的に方法を採られ、最初に「經營學と經濟學とを區別する標徴は研究の立場の相違にある」と述べられており、また、「經濟學を自然經濟たる綜合經濟の研究と見るとき」、云々と言はれてゐるから、國民經濟も意志經濟としては經營學の側のものとなり、従つて國民經濟は大なる各箇經濟となるのではあるまいか。宜なるかな、博士は云はれる。「國民經濟學と雖も、自然經濟に止まる間は論外であるが、それが意志經濟となり且つ團體統整主義を執るに至らば……、國民經濟は次第に經營學的研究を以て主要なる任務とするに至るであらう。かくて結局吾人の着眼すべき所は、謂ゆる經營學と經濟學との對照は經營に關するものと然うでないものと對照よりも尙ほ深入りして、寧ろ各箇經濟論と綜合經濟論との二種の經濟學の對照であると謂はな

8) 同上 一二頁。  
9) 同上 二頁。  
10) 同上 一二頁。

ければならぬ」と。蓋し、この思想が當時確實に博士において根を下ろし、後に「自然經濟と意志經濟」として經濟を二大領野的に對照するものとして發展成熟するに至つたものであらう。<sup>12)</sup>

かくて博士によれば、經營は意志經濟であるが、國民經濟もそれが意志經濟に進むやその研究は次第に經營學的研究が主要任務となる。かくて、經營が嚴密な意味で經營たるは博士によつて公私企業の經營であるとしても、かゝる經營もその本質において意志經濟たるが故に經營學の問題となることから、經營學の本質を媒介するものは實に意志原理一般であり、國民經濟もその意志經濟たることを媒介として經營學的性質の研究となるに至る。すなはち、博士を經營學意志經濟說に含めた所以である。

こゝで注意したき事柄は、博士にありては經濟における意志性の存否によつて經營學のか經濟學的かの岐るゝ標徴となるが、これは最初から博士によつて觀念的規定を受けたるが故に然うなつたのではなくて、かゝる一般的指定に到達する過程においては經濟の發展並にそれに應じた學問の發展を歴史的に辿られたることは曩に掲出したる論文を全讀するものゝひとしく知るところであらう。由來經營學者のうちには、論者の思惟過程が如何にあつたであらうことに頓着なく、その到達したる結果の一般性の故に直にそれを歴史性の貧困をもつて目することが往々であるからこゝに附記して誤解のなきことを祈る次第である。

谷口吉彦教授は、最も明白なる經營學意志經濟說論者である。教授が一般に經濟事象をその意思性の有無によつて、これを「經濟現象」と「經濟活動」とに分たるゝことはすでに第二章でこれを述べたが、「狹義の經濟學即ち理論經濟學」はこの「經濟現象」すなはち「社會經濟現象……」を研究の對象とする<sup>13)</sup>に對し、「經營學」は、後者たる「經濟活動」すなはち「個別經濟活動……」を研究の對象とする。然るに經營學はかくて個別經濟活動のみを研究對象とするものであり、その故に意志性を帯ぶるに至つた國民經濟はこれを對象となし能はないかどうかといふ點がこの際一應の問題となる。何故なら、教授において經營學の對象は個別經濟活動と一應規定せられてゐるから。

この問題は、教授において、經營學の對象と經濟學の對象との相違が、根源的には、個別經濟と然らざるものとの相違に本くものであるか、それとも、元々「經濟現象」と「經濟活動」といふ意思性の有無に本くものであるか、を検討すれば正しき解釋を得るであらう。而してこの點については疑もなく教授にありてはひろく經濟事象についての意思性の有無に本くものなることは明であらうと考へられる。蓋し、經濟活動と經濟現象との區別は教授において意思性の有無による「本質的區別」であるからである。<sup>14)</sup>

それ故に教授が經營學の對象を規定されてこれを「個別經濟活動」に求められたのは、當時の教授の判斷において意志性をもつと認められた經濟は個別經濟以外には支配的には存しないと考へられ

13) 谷口吉彦博士 商業組織の特殊研究 三一頁、四、五頁。

14) 谷口博士 前掲書 四頁、五頁。  
同 經營組織と經濟組織「經營と經濟」第一卷第三號、一九、二〇頁。  
二四頁。二八—三一頁。

11) 同上 二〇頁。

12) 作田莊一博士 自然經濟と意志經濟。  
拙稿 「作田教授自然經濟と意志經濟」京都帝國大學新聞 昭和四年十一月十五日發行參照。



てゐたからであらう。すなはち、經營學の對象に關する歴史的な規定であつたのである。然らば教授はその以後においても經營學の對象をば個別經濟活動に限定せられてゐるか云へば必しも然うではない。教授は別のところで云はるゝ之を他方より見れば、放任經濟から統制經濟への轉換の一面を示すものであり、それだけ社會經濟の經營經濟への轉換を意味し、同時にまた經營經濟學には、營利的なる社會經營學の外に、公益的なる社會經營學の廣大なる領野の拓かれつゝあることを暗示するものではないかと思ふ<sup>15)</sup>。云はるゝ「二十世紀は經濟學が經營學に轉向する時期である。社會經濟は放任經濟から意思經濟、計畫經濟、統制經濟に向ひつゝあり、従つて研究も社會經營經濟に向けられるべきである<sup>16)</sup>」と。

元よりこゝに社會經濟の經營經濟への轉換と云ふのは、經濟の意志性が個別經濟以外、國民經濟がその支配的自然性より意志性への轉換を意味し、また、公益的なる社會經營學とは、かゝる國民經濟の經營化事態に應ずる國民經濟的經營認識の學を指すものと考へられる。

以上が谷口教授の經營學意志經濟説の紹介である。勿論、教授の定言のいづれにも經營を直接に指定したる箇所は無く、従つて、經營學の對象に關する教授の立言からその經營概念を導出したのであるが、大體その眞意を傳へ得たかと考へる。

## 三

次に上述せる經營學意志經濟説を簡單に批評することとする。

おもふにこの説の根源をなす思想は經營の特質をもつて意志活動目的活動と觀る點においてブロン教授等の場合と同じであるが、たゞこの場合これを經濟の經營に限定することにおいてライトナー教授と同一である。とゞも異なるところはそれらの指定がブ氏並にラ氏のそれに比して系統的科學的なる點にある。元來、社會科學上の概念指定と雖も社會的實在の影響の外に立ち得るものではないから、歴史的社會そのものとも變化發展するものと見なければならぬ。が苟くも學者はこの歴史社會の故に囚はれて餘りにも近眼的に歴史性に固着することは決して妥當とは考へられない。要はローゼンベルグの云ふ如く一般的なものゝために歴史的な差別を見失ひさせねば宜い<sup>1)</sup>。ゾムバルトの如くその概念を再三にわたつて變改することは定見の貧困と見られても致方ないであらう。

私見によれば社會科學上の概念が歴史的社會の影響に支配さるゝことの例證は「經營」概念において特に甚しかつたのではないかと考へてゐる。經營をもつて技術的生產單位と解せし比較的最初の文献についてみれば、支配的にみてその時代が資本主義の上昇發展期に相當し——マルクスの資本論第一版は一八六七年、ゾムバルトの近世資本主義論第一版は一九〇二年の出版——、その限りから云へば、生産單位説の濫觴は十九世紀である。當時、資本主義は未だ上昇期に屬し、低度資本主義國乃至未資本主義國がなほ多かつた事情等から、市場は未だ廣大であつたから、企業の利潤活動の中心は生

1) ローゼンベルグ 前掲書 六〇頁。

15) 谷口博士 商品配給組織の發展傾向について(經營學論集)第七輯 商品市場組織 二二頁。

16) 同上 二三頁。

産過程に集中し、生産過程は企業活動の中樞的機能の位置におかれてゐたに違ひない。従つて支配的  
に見る限り、生産過程は經營の中樞であり、經營は生産過程に中軸をもつ結果、經營即生産單位の思  
想を育くむに極めて自然であつたに違ひない。失業は勿論存したしそれがマルクスの學說の一根底部  
を刺戟したことはあらうがそれでもなほそれは二十世紀的重大性をもつに至らなかつたから、家計  
的困厄も、従つてその云はゞ經營論的考察への學問的興味と重大性も、相對的に低かりしことは想  
像に難くはない。マルクスの價值説の當時の社會に對する歴史的妥當性も生産單位經營説と元より關  
聯するところがあらう。

然るにこれと異つて二十世紀は市場狹溢化の世紀である。流通過程は重大化し企業活動は生産過程  
より擴大してこの過程の計畫的活動の要求をば著しく増大したとゞもに、資本増大による利潤への期  
待も益々大きくなることによつて計畫活動の領野は財務方面に迄愈々擴大した。しかも資本主義的大  
規模企業はそれに應じて擴大した活動範圍の全領野と、財務、仕入、生産、販賣の全過程とを、統一的  
に掩ふことが重大性をもち、經營は經濟單位的なものとなつたのである。計畫活動の領野の増大は經  
營的視野の擴大である。經營概念はかくて歴史的社會とゞもに發展する。かくて資本主義的矛盾の深  
刻化は計畫的統制活動の領域をば國民社會的範圍にまで擴大するに及び經營はその概念を社會的に  
擴充せざるを得ない必然性に遭遇し、經營の概念内容を一般的本質的なもの、媒介によつてこれを把

握しやうとする努力とゞもに、そこに出現したるものが意志的計畫性の經濟についてのその認定で  
あつたのである。云はゞ經營Ⅱ生産單位説は十九世紀思想の沈澱物であるに對し、經營Ⅱ意志經濟説  
の如きは現歴史的且一般本質的把握とも云ひ得やうかとさえ考へらる。<sup>2)</sup>

是に仍つて見れば、經營Ⅱ意志經濟説は經營概念に關する本質學的方法による概念である。が、こ  
れを本質學的に把握することはそのこと自體において何ら歴史性を捨象したことでないことは前章  
で論じたとほりである。否、これを歴史發展に應じ、經營を歴史性的に把握するためにこそ本質學的  
把握を必要としたものでなかつたか。かの歴史性論者が十九世紀的思想に固着せむとすることが却つ  
て非歴史的固定化ではなかつたかとさえおもふのである。

## 八 要 括

以上、「經營」そのものゝ概念に關する諸家の説を紹介、批評して來たが、それらのうち、經營Ⅱ  
協同體説に屬するものといへども、その實、それぞれの内容に従つて、それ以外の他の所屬に組入れ  
ることが妥當でないかとおもふ。蓋し、協同體と云つてもそれは綜合經濟的性質のものを意味せず、  
實質的には何らかの種類の經濟單位説であるからである。従つて、いま、以上の諸説をその實體的所  
屬に應じてこれを整理して、これらを一表に纏めると次の如くなるであらう。

2) 拙稿 經營學講話 (九、一〇) 企業經營 第五卷第三號、八一—  
八三頁。



經濟學 Privatwirtschaftslehre)、『ゾエルハイム(個別經濟學 Einzelwirtschaftslehre)』、『ホフマン(商人的企業經濟學 Wirtschaftsflehre der kaufmännischen Unternehmung)』等である。

例へば、リーガー教授の「私經濟學」にその理由を求めやう。教授の經營概念については前に簡単に述べたが(一二九頁—一三〇頁)、要するに教授は經營を技術的生產單位としそれ自體としては經濟と観ないから、經濟學は經濟を對象としなければならない。然るに經濟とは、今日の經濟組織が貨幣を媒介として行はれ、それ故に經濟するとは財務的・貨幣的問題の特質からのみ導き出され得、すなはちすべての經濟は貨幣に集注する。従つて貨幣の方向への意欲の目的追求が經濟への途であり、經營は貨幣なく収入無ければ持續されず生産も維持され得ないといふのである。經營はこの貨幣への意欲のすなはち經濟の手段道具であり。かくて教授は氏のこの學問が統一的な對象、一義的な對象をもつべきであるといふ要求から、今日の經濟社會の支配的な經濟として營利經濟すなはち企業を把握し來り、企業が企業家の營利目的に利用せられ、經營はそれに役立てられるが故に、斯學は企業家の營利經濟すはち私經濟 Privatwirtschaft を對象とし、こゝに私經濟學の成立となるといふ。

ホフマンの如きも「經營經濟學の對象は、經營ではなくして、企業である。だから經營經濟學といふ名稱は間紛ららしい。經營とは企業の物的・技術的基礎である、すなはち、ひとは企業なる全體の替りに單なる基礎を一の經濟學の對象とすることは出來ぬ。生産技術的意義における經營を對象とす

1) W. Rieger, Einführung in die Privatwirtschaftslehre S. 32—43.

るが如き經營經濟學は經濟學の名に値ひせず、それは技術學としての經營學であらう」と云ふ。<sup>2)</sup> かくて氏はその著書を商人的企業經濟學 Wirtschaftsflehre der kaufmännischen Unternehmung としつゝ、その書の副題を經營經濟學と附してゐるが、これはその名に拘らず經營經濟學の實質を企業の經濟學と見たために過ぎないと考へられると同時に、氏が經營經濟學といふ名稱に殆んど重要性をおかずたゞその時代性の故にこれを副題化したに過ぎぬかに見える。<sup>3)</sup> にも拘らず、氏が企業上から見た立地を經營立地 Standort der Betriebe と云ふは兎も角も、資本構成や財産構成をば經營分析 Betriebsanalyse など云ふのは常套語に従つたといふよりは間紛ららしい用語を使用したと云はねばならぬ。<sup>4)</sup>

かくて、ゾエルハイムはまた同様な理由から氏の斯學の對象が個別經濟——「個別經濟とは法的主體の經濟單位を云ふ。個別經濟の種類、本質、設定、機構變化、持続性は當時の彼によつて追求される經濟目的に従つて決められる」と——にあるの故に、「個別經濟的過程、その組織形態および手段に關する科學が個別經濟學なり」としてこの名稱を採る。

然るにまた、「經營」を技術單位と解しつゝ、學問の名稱はその内容にとつて重大ならずとして敢て「經營經濟學」の名稱を採るものにジーバーがある。

ジーバーによれば營利經濟たる企業はそのために多くの外部的、技術的諸設備を必要とし、これ

2) A. Hoffmann: Wirtschaftslehre der kaufmännischen Unternehmung, 1932, S. 1.  
3) Vgl. F. Schönplug: Das Methodenproblem der Einzelwirtschaftslehre, 1933, S. 12.  
4) Hoffmann: Ibid. S. 29, 62 ff.  
5) Sölheim, Zur Methodologie und Systematik der Einzelwirtschaftslehre (Archiv der F. b. F. u. L., 4. Jg. 1927, insb. S. 41.)

らの諸設備の總體が經營である。すなはち經營とは企業がその目的を達するために使用する道具 Werkzeug であり、經營は技術的單位である。かくて經營は手段であるからつねに企業に下屬してゐなければならぬ。經營は何ら獨立の目標をもつものではないとし、經營は企業の指導下に技術的任務を遂行するものであるからそれ自體未だ經濟的のものではないとする。ジーバーは經營をかく解する結果「經營經濟學」なる名稱を不適當とするが、併し乍ら、科學の名辭からその科學の問題を推論せぬといふ條件のもとで「經營經濟學」と呼ぶことを支障なしとし、自らもこの名稱を使つてゐる。<sup>6)</sup>

然るに、これらの人々と異りて、中西教授、池内教授のごとき人々は、經營を技術的單位と解しつゝ、「經營經濟學」なる名稱を採用せられてゐる。然らば、これらの人々にあつては、「經營」と「經營經濟」とは如何なる關係においてみられてゐるかといふに、殆んどそれは明ではない。たゞ、中西教授においては「經營經濟學」なる強調を見、池内教授にありては「營利を追求する經營、これが企業である」と示されてゐるにすぎぬ。

であるから、中西教授にありて獨逸學者のごとくに、「經營の經濟」Wirtschaft des Betriebes と解すべきであるならば、ゾエルハイムの疑ひのごとく、それは單に企業の一部でしかないといふこととなり、又、技術的生產單位を有たない經濟は經營經濟と稱し得ぬこととなり。こゝでも私見

はある經濟が、經營經濟と認められ得べくむば、それは經濟が一定見地から把握されたものと解せざるを得ないのである。また、池内教授の場合においても、「營利を追求する經營、これが企業である」<sup>10)</sup> ためには、「經營は、それにおいて經濟せられるから——たとへ形式的とは云へ——それが經營經濟と云はれる」のであらう。だからやはり經濟的理念乃至意志が主んぜられ、そのものから眺められたといふ語勢を否定し得ぬ。もし經營を有てる經濟なるが故に經營經濟と呼ぶといふならば、あまりにも無意義であり、技術的生產單位を缺く經濟には妥當せぬ。

馬場教授には「經營經濟」の用語はなきごとくであるが、教授が經營體を經濟的生產單位とせられ乍ら、財務單位たる企業體との統一物を産業體とし、それを對象とする科學を「經營學」とせられたこと、竝に、レーマンが同様な考をもち、一獨立經濟單位としての企業を、事實上對象としつゝこれを經營經濟としたことは前にこれを述べた。

従つて、要之、經營をもつて技術的生產單位とする人々も、或は、經濟的生產單位説を採る人々も、「經營經濟」といふものを克く説明し得ないといふことに歸着する。

## 二「經營」と「經營經濟」とを同概念と解する説

さて、以上前項で述べたるとほり、經營＝生產單位説を採る人々にあつては、それを技術的と經濟的とのいづれに解する場合においても、「經營」と「經營經濟」もしくは「經濟單位」とが異概念で

10) 池内教授 前掲論文参照。

11) Felden-Zakrzewski, Betriebswirtschaft, ihre Geschichte (Hwb. der Betriebswirtschaft, 1. Band, S. 1131.)

6) 安部隆一氏 ジーバー「經營經濟學の對象と方法」企業經營 第六卷第一號。一一頁以下。

O. Sieber, Objekt und Betrachtungsweise der Betriebswirtschaftslehre, 1930, S. 38 ff.

7) 中西教授 經營經濟學 二頁。

8) 池内教授 前掲論文参照。

9) Sölheim, Ibid. S. 61.

ありとしつゝ、「經營經濟學」または「經營學」の名稱を採ることの不徹底であるに引換へ、經營經濟單位説を採る人々は、その經營として解する經濟單位が汎ろく生産經濟であると企業であるとその他如何なる經濟單位であるに拘らず、多少例外はあるが大體一樣に、經濟を一定見地から眺むるが故に「經營」もしくは「經營經濟」たり得るとしてゐる點に特徴をもつ。(それらうち、村本教授は「經營」をすでに「經濟單位」——教授の場合生産經濟と指定されつゝ、「經營經濟」なる名辭を排斥し、「經營」の名辭をもつて一貫せられるから、姑くこゝには除くとする)。

いまそれらの經濟單位説及び若干の他の人々のうち、「經營」と「經營經濟」とが、その内容となる經濟單位の差別に關せず、全く同義と解する人々を擧ぐれば、増地教授、佐々木教授、平井教授、谷口教授、古林教授、ニックリツシュ、メレロウイツツの諸氏がある。私見もまたこの二つのものを同義と解し、正確には「經營經濟」を採り、たゞその略稱として時に「經營」と稱することあることは前に述べたところである。たゞ、斯學を稱呼上、ある人々は多くつねに「經營學」なる稱呼を採り、他の人々は「經營經濟學」の名稱を採るにすぎぬ。

三「經營」と「經營經濟」との異同に關する私見

以上述べたところを参考のため一表に示せば、次の如くならうかとおもふ。

「經營」概念上の區別	斯學の研究對象上	斯學の名稱
經營Ⅱ技術的生產單位説	個別資本 資本主義的企業 企業 私企業 個別經濟 私企業	經營經濟學 經營經濟學 經營經濟學 私經濟學 個別經濟學 商人的企業經濟學
經營Ⅱ經濟的生產單位説	產業體、準產業體 經營經濟(生産經濟) 生産經濟	經營經濟學 經營經濟學 經營經濟學
經營Ⅱ生産經濟説	生産經濟的協同體 經營經濟(事實上企業) 資本主義經營(企業) 企業(?)	經營經濟學 經營經濟學 經營經濟學 經營經濟學
經營Ⅱ強固經濟構成體説	個別經濟一般	經營經濟學
經營Ⅱ營利經濟説	單獨經濟	經營經濟學
經營Ⅱ個別經濟説	個別經濟	經營經濟學
經營Ⅱ意志經濟説	意志經濟(特に企業) 意志經濟(〃) 意志經濟Ⅱ經營經濟	經營經濟學Ⅱ經營學 經營經濟學Ⅱ經營學 經營經濟學Ⅱ經營學

1) 村本教授 經營學原編 二三頁。

私見によれば、すでに前にも若干これを述べたる如く、一般的に問題とする限り、「經營」とは、根源的には人間の意欲 *Wollen* に根ざすところの、一定の經驗的・現實的目的を志向し、それを追求實現せむとするところの、目的・手段の行爲總體 *Inbegriff der Handlungen* である。かくて一般に「經營」には、その合理性に程度の相違あるにも拘らず、つねにその目的へはたらかうとする自我的な意念を含む。この自我的な意念こそ經營的なものゝ性格である。

然るにいまわれの問題とするのは、「經營」一般ではなく、意味領域的に「經濟」の經營であり、内容的に「經濟經營」*Wirtschaftsbetrieb* である。然るにまた、「經濟」一般 *„Wirtschaft“* überhaupt は、見地の仕方異なるに従つて、すでに以前にも述べたるごとく、分れて社會自然的な「社會經濟」*soziale Wirtschaft* となり、主體意志的な「經營經濟」*Betriebswirtschaft* となる。しかし、この場合、主體意志的な經濟が「經營經濟」として把握されるのは、かゝる經濟が「經營」を有つ「經濟」といふからでもなく、また、元より謂はれるごとく「經營の經濟」*Wirtschaft des Betriebes* といふがごとき理由からでも無い。否、經濟が「經營經濟」たり得るのは、かゝる「經濟」自體が事實上すでに「經營」であることゝも、且つ、それが曩の「目的へはたらかうとする意念の性格」として把握されるために外ならぬ。かくて、それがつねに「目的へはたらかうとする意念の性格」の故に、見地的に「經營經濟」*Betriebswirtschaft* と呼ばれざるを得ないとすれば、それはそこ

で「社會經濟」と對照する。私見は、「經營經濟」とはかやうに解すべきものであると考へてゐる。

かくて、この「經營經濟」が略稱されて「經營」と呼ばれるのは、まさに「社會經濟」が略稱されて單に「經濟」と呼ばれるのと對照し、それ故に、經營經濟學の研究對象としての「經營」は、「經營經濟」と同義でなければならぬ。

#### 第四節 經營經濟の本質と現象形態

以上の三節において「經營」に關するおほよそ諸家の説を紹介し、批評し、次で、「經營」と「經營經濟」とが諸家によつて如何なる關係に立つかを考察し、併せて認識對象としての兩者を同義と見るといふ卑見の一端を述べたつもりである。そのため期せずして比較的長き記述を敢て爲したる觀あるが、元來、「經營」概念ほど區々多岐に解せられ、論議されたる概念は、恐らくひろき意味における經濟學を通じてその例稀なることの結果、寔に止むを得ざるに出でたる譯である。いまや、それら累しき仕事を一應終へたと考へるから、本節において、「經營經濟」の本質學的概念について積極的に私見を簡述しやうとおもふ。

さて、經營經濟學の對象は經營經濟 *Betriebswirtschaft* である。意志する主體がその目的に従つて意識的に統一する限りの經濟を、かくの如きものとして、すなはち、經濟的目的へ活動しつゝあ

るものとしてそれを把握するとき、かゝる經濟は經營經濟である。

それ故に、經營經濟學の對象としての經營經濟は、先づ前提的に、主體が一定の經濟的目的に對つて意識的に統一的な手段活動を營める事實の存するといふこと、併せて對象化上、かゝる主體的經濟が目的へはたつきつゝあるものとして把握されてゐるものでなければならぬ。例へば個別經濟は目的的活動を營みつゝある經濟ではあるが、かゝる事實だけではそれは直ちに必しも對象としての經濟經濟的ではない。何故なら、個別經濟は綜合經濟の構成部分としても對象領域上考察され得るのであるから。従つて、個別經濟が經營經濟として指定されるためには、目的活動を營めるといふかゝる事實が對象化上でもかゝるものとして把持されることが必要となる。

經營經濟學の對象としての經營經濟の本質は、かくて、主體が目的・手段の統一的關聯において統轄する限りの意志的統體經濟が、對象化上でもかくの如きものとして指定せられる點にこれを求めねばならぬ。云ふ迄もなく、經營經濟のかやうな本質が事實の存在無しに指定せられ得るものでないことは、曩に對象化の前提として事實の存在を條件としたことによつて明かであらう。併し乍ら、かやうにしてひとたび一定の事實を前提とし、それから指定化せられたかゝる本質は、それが歴史的事實において指摘せられるや、本質は既存的、現存的、可能的な事實にも妥當するであらう。私見は「經營經濟」とはかやうに解すべきものであると考へてゐる。

昭和十二年六月五日發行  
昭和十三年五月十五日再版印刷  
昭和十三年五月二十日再版發行

經營經濟學原論(第一分冊)

定價 壹圓六拾錢

著者 松井辰之助

發行所 大阪府北區曾根崎上三丁目八番地  
株式會社 大同書院  
代表者 松本善次郎



發兌

大阪府北區曾根崎上三丁目八番地  
電話 三一九七二番  
東京市神田區  
電話 東一六五三・五七五二番  
電話 神田二二二八番

大

同

書

院

(部本製刷印院書同大)

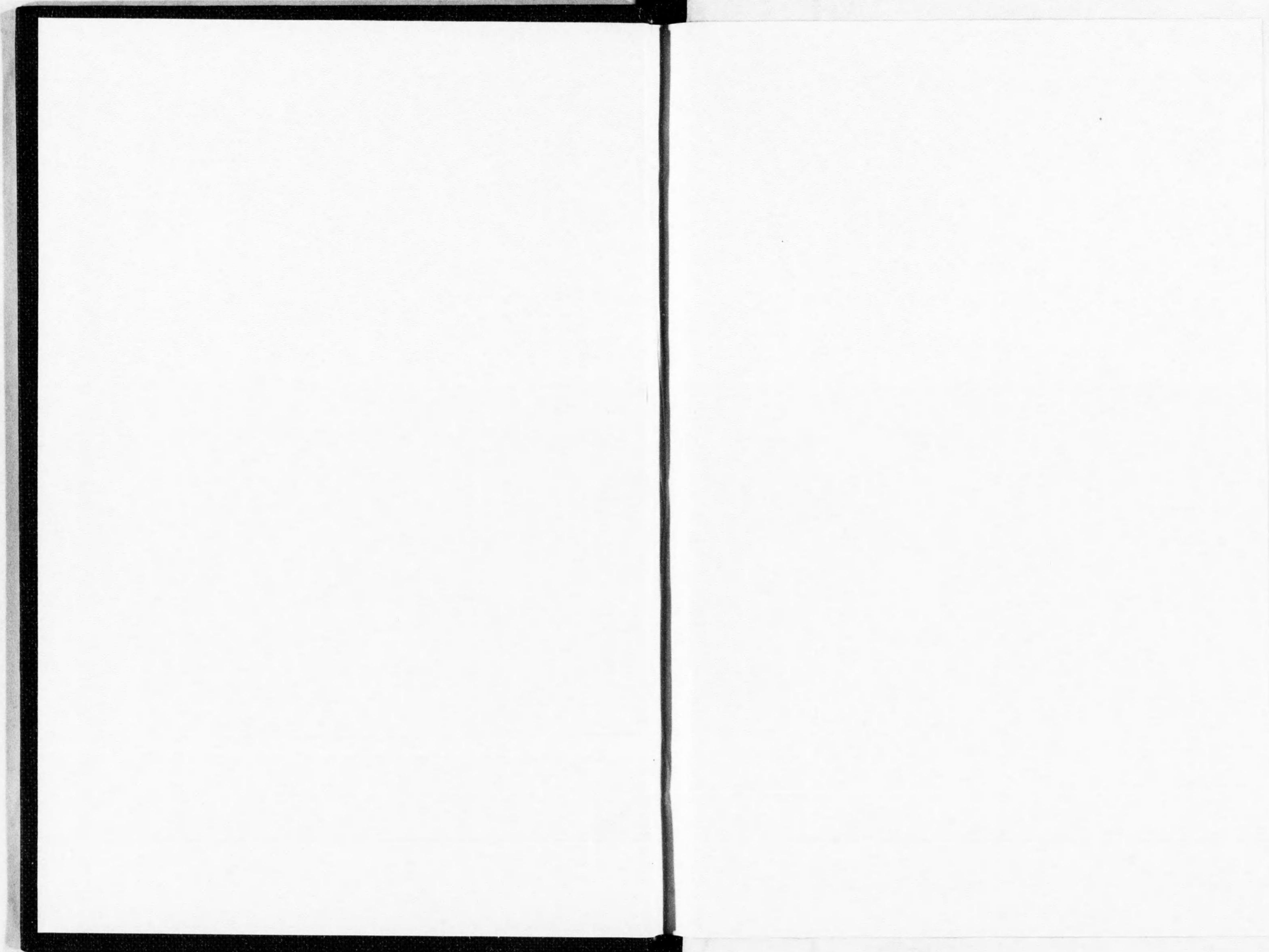


6p 117

大 阪 商 大 高 商 部 教 授  
大 阪 商 大 助 教 授

松 井 辰 之 助 編 著

經營經濟學原論 第二分冊	近 刊	大同書院	
小賣商經營改善通俗五講	近 刊	大同書院	
商店街の研究	近 刊	大同書院	
小賣商問題概論	近 刊	大同書院	
經營學講義要綱	昭和七年再版	文雅堂	絶版
經營經濟學原論 第一分冊	昭和十三年再版	大同書院	一・六〇
商業經營論	昭和十二年	千倉書房	二・〇〇
英文經營學論集	昭和十年再版	大同書院	二・〇〇



終